

子ども時代と私(12)

小学生の頃



尾田 幸雄

昭和五年の十二月、私は東京の品川で生まれまして。両親は芝の生れで生粋の江戸っ子でした。五人兄弟の末子だった私は、両親からひたすら甘やかされて育ちました。

そのせいか近所の幼稚園に初めて連れてゆかれたとき、なぜか人見知りして子どもたちの仲間に入れず、

そのまま家に帰ってきてしまいました。結局、幼稚園には通わずじまいでした。

学齢以前の記憶といえば、昭和十一年二月二十六日、東京が大雪に見舞われた日の早朝、驚天動地のクーデター事件が発生、ラジオでアナウンサーが「流れ弾が飛んでくるかも知れないから、外出しないよう

に」と叫んでいたのを覚えています。その後、有名な「兵に告ぐ」という放送も聴きましたが、そのときはまだなんのことも意味が分かりませんでした。とにかく物情騒然とした世の中でしたが、子どもには関係ありません。

昭和十二年四月、桜の季節に家から歩いて数分のところにある品川区立城南尋常小学校に入學しました。明治七年創立という古い小学校で兄も姉もみんなそこに通いました。

校門をくぐると校庭の正面に二宮金次郎の銅像が立っていて、登校する児童たちを迎えてくれました。

この銅像は、柴を背に負いながら、読書にいそむ少年の姿をかたどったもので、当時の小学校唱歌に、「柴刈り 縄ない 草鞋わらじをつくり、親の手を助け 弟を世話し、兄弟仲よく孝行をつくす、手本は二宮金次郎」と唱われたあの修身教科書の花形でした。

その頃の小学校教育では、各教科の筆頭に修身とい

う教科が置かれ、これが戦前の道徳教育のかなめの時間だったのです。

戦前の道徳教育の原理は、明治二十三年十月三十日に発布された「教育勅語」に示されていて、その根本は忠と孝でした。国家は家族を拡大したものであるとする家族主義国家観にあつては、国家に対する国民の忠誠と、家族の親に対する孝行とは一本のものと考えられていたのです。

「骨身を惜しまず仕事に励み、夜なべ済して手習読書せわしい中にも撓たぶまず学ぶ 手本は二宮金次郎」は、勤勉の象徴であつたばかりでなく、正直、儉約、自立自営、博愛、公益の諸徳目を一身に集めた理想的人間像でもありました。

私が小学校の六年間を過した学級の担任は、中野茂訓導（故人）でした。旧制度の専任教諭は当時訓導くんとうと呼ばれていたのです。

先生は優れた教育者であつたばかりでなく、ご自身

が熱心な求道者でもありません。どの教科も分り易く見事に指導なさったほかに、学級のためにわざわざ芸会まで開いて下さいました。

その先生が自ら級訓を作って、私たちに示されたのが、次の四ヶ条です。

- 一、御国の盾となります。
- 二、親のいいつけを守ります。
- 三、よく勉強します。
- 四、黙って働きます。

同級生たちは、小学校を卒業してからも、この級訓を守り、御盾会を結成して亡き先生の遺徳を偲んでいます。

さて、私たちが小学校に入学した年の七月、いわゆる支那事変が勃発しました。戦争時代の幕明けです。しかし、意外にも内地の生活は平静で、むしろ活気に溢れていました。

昭和十五年には、建国紀元二千六百年の祝典が催さ

れ、日本国中が湧きかえりました。

そして、いよいよ昭和十六年、私たちが小学校の五年生の十二月、運命の大東亞戦争が始まるのです。当時はそういう名称で呼ばれていた第二次世界大戦は、緒戦の勝利に酔いしれていた私たちには、それがどういう結末を迎えるのかまだ分かりませんでした。

昭和十七年の四月、突如として日本本土が米軍の空襲にさらされます。ひそかに本土に近づいた米軍の航空母艦から飛びたったロッキード・ハドソン型の爆撃機が超低空で侵入、爆撃や銃撃を加えた後、中国本土に飛び去ったのです。ほんの一瞬の出来事でした。

私自身、空爆警報がなりやむかやまないかの中に、



品川沖から敵機が爆弾を投下する様子をこの眼ではつきりと目撃しました。勿論それを迎え撃つ日本軍の高射砲もなりやみません。それはそれは恐ろしい体験でした。自分のいのちがこれほど惜しかった瞬間は後にも先にもありません。およそ価値というものは、それがふんだんにあるときはその値打ちに気づかず、それが失われたとき、乃至失われかけたときに翻然とそれに気づくものです。その意味で、小学校六年生のときの体験は貴重な体験でした。

それにもかかわらず、この年の夏には、千葉県内房の保田海岸で一週間近く臨海学校が催され、秋には関西方面への修学旅行が行われました。もっとも戦時下であって、これがこの種の催しの最後の機会となりました。

修学旅行は、品川駅発の夜行列車で車中一泊、京都下車、平安神宮参拝を皮切りに市内観光の後、奈良へ。東大寺の大仏拝観、春日大社参拝、奈良公園や若

草山で鹿と遊んで一泊。翌日は橿原神宮参拝を経て伊勢へ。二見が浦一泊。そして、また車中一泊で品川にもどりました。このように四泊（内車中二泊）四日というまことに酷しい日程でしたが、戦時下の非常時に、日本人の心のふるさと伊勢神宮を奉拝できたのは望外の喜びでした。

宇治橋を通って五十鈴川を渡り、神域に歩を進め、玉砂利を踏みしめて正殿に額ぬかくときの神々しさは、子ども心にも西行の「なにでとのおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」の心境でした。

処で、小学生時代の私の愛読書の一つに、「あらえびす」の『楽聖物語』があります。

『銭形平次捕物控』で有名な野村胡堂は、別の筆名「あらえびす」でレコード評論なども手がけていたのです。この書物は、バッハ、ヘンデルから始まって近代にいたる著名な作曲家とその作品を紹介し、あわせてその作品のレコードを比較論評したものです。

たとえば、ベートーベンの交響曲第五番『運命』について、「あらえびす」は指揮者のフルトベングラーとトスカニーニを比較しています。たまたまこのレコードを兄と共同出資で買うことになって——もっとも費用の大部分は兄が、残りのちよびりを私が負担したのですが——いろいろと議論をいたしました。結局は、当時ビクターが出していたトスカニーニ指揮の音盤を買ったのですが、そのときもこの『楽聖物語』は大いに参考になりました。CD全盛時代の今日とは違って、手巻きの蓄音機に鋼鉄針、戦時下にあつて物資が不足してくると竹製の針で聴くといった有様でしたが、それでもこの曲の「運命の扉を叩く」といわれる出だしの部分を初めて聴いたときの感激は忘れられません。

同じく兄と共同出資して購入したレコードに、当時コロンビアから出ていたブルーノ・ワルター指揮でウィーンフィルハーモニーが演奏したベートーベンの交響

曲第六番『田園』があります。

このレコードが手に入ったのは、折も折丁度中学校受験の合格発表の日でした。

現行の教育制度では、中学校までは義務教育ですから、特に国立や私立の中学校を目指すのではない限り、小学生に受験勉強は必要ないのですが、旧制度では中学校や高等女学校は義務教育ではありませんでしたから、上級学校を目指す以上は小学校の六年生にも受験準備が必要だったのです。

もつとも、それまで周囲の者から甘やかされて育ってきた私にはその切実感が湧いてきていませんでした。すべて自分を中心になんともなくうまうま自然に事が



運ぶかのような錯覚にとらわれておりました。ですから、受験自体は、自分が後から考えてみてけしてうまくいっているとは思えないのにもかかわらず、それでもどうにかなるだろうと楽観していたのです。そんなわけで、合格発表当日、ゆうゆうと入手したばかりのレコードを聴いてから結果を確かめに家を出る積りでした。

果して、ベートーベンの交響曲第六番『田園』の第一楽章は素晴らしい演奏でした。暫しこの世のものとは思われぬ美しい調べに心を酔わせ、後は合格発表の結果を見てからのお楽しみに残して家を出ました。

目指す中学校の合格発表会場です。すでに発表の予定時刻の前から合格者名の掲示板の周囲は黒山の人だかりです。私もその輪の中に入って静かに勝利の美酒を味わうべく発表の時を待ちます。

いよいよ合格者発表です。合格者の名前を書き連ねた巻紙がくりひろげられます。そこそこで歓声が湧き

おこります。一方では、首をうなだれて黙ってその場を去る者もいます。では、肝心の私の名前はどうか。どうか。ないのです。どこを捜しても見つからないのです。一字違いの似たような名前はありますが。眼の前が真暗になりました。

この瞬間、生れて初めて悟りました。この世の中が私を中心に動いているわけではないことを。

これは私にとって、天動説から地動説へのコペルニクスの転回にも比すべき改心の体験でした。あまやかされて育った増長の夢を打ち砕かれ、頭の中が真白になりました。

いまでも、ベートーベンの交響曲第六番『田園』の冒頭の部分を聴くと、思わず肅然として身の引きしめる思いがいたします。

これが私の子ども時代の思い出です。

(お茶の水女子大学名誉教授)